

せん によ  
お仙女ぎつね

昔、水谷原から永谷に向かう道の途中に、大きな松の老木が数本、枝をいっぱい広げて立っていました。道を行く人々は、夏になると、必ずこの老木の陰で休んでいくのでした。

その老木の下には小さな祠ほくらがあり、土地の人々はぎつねの祠だと言っていました。

なぜなら、この付近は狐や狸が娘の姿に化けて出て、道行く人を騙だますからです。夕暮れが近づくと、子どもはもちろんだ大人でも通る者がなく、大変さみしい所でした。

ある秋の日のことです。中鶴に住む、魚屋の助太郎すけたろうという元気のよい若者が、いつものように、日置に魚を仕入れに行った帰り道、ここを通りかかりました。日も西の山に沈みかけ、夕暮れが近づいていたので、急ぎ足で祠の近くまで来た時です。ふと見ると、祠のかたわらに、若くてとても綺麗な娘が立っていました。しかも助太郎が近づいて来るのを待っている様子です。しかし、助太郎は何食わぬ顔で、娘の前を通り過ぎようと思いました。

その時です。娘がススススッと、助太郎のそばに寄って来て、おそろおそろ言いました。

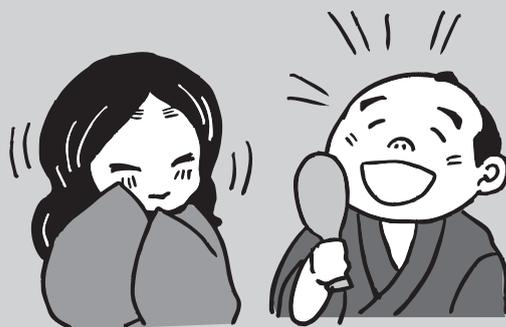
「もし、もし、助太郎さん、私、神祭こせの野まで行きたいのですが、もう日が暮れかかっていますし、とても寂しいので、一緒に連れて行ってください。」

と頼むのです。助太郎は、「ごやつ、狐だな」と思いましたが、素知らぬ顔をして

「いいとも、いいとも、一緒に来るがよい。」と、快く引き受けました。

そして、娘を先に歩かせ、自分はその後から、ぼつぼつ歩いて行きました。後からついて行くうちに、知恵の働く助太郎は、ふと、あることを思い付き、娘に話かけました。





「私は、鬼ヶ久保の下り松の狐だが、あんたは、まだ化け方が下手だよ、お尻のあたりから、しっぽが出ています。私はそんな下手な化け方はせん。」

と冷やかしたところ、娘は大変驚いて言いました。

「あなた様はどうしてそんなに立派に、化けられるのですか。」

助太郎はすかさず、得意になって言いました。

「私の化け道具は、ただこれだけなんだよ。」

と言いながら、懐から小さいしゃもじを出して、娘に見せながら聞きました。

「お前さんは、どうやって化けるんじゃないね。」

娘は、すぐに答えました。

「私は、家に代々伝わる、親ゆずりの、この玉で化けるのですよ。」

と言って、宝として秘蔵しているという、梅干し大ほどの美しい黄金の玉を、帯の間から取り出して、助太郎に見せました。

黄金の玉は、キラキラと光りながら、娘の手の平の上で輝いているのです。それを見た助太郎は、「しめた」と思い、いきなり大声を出して、カラカラと笑いながら言いました。

「その玉は、ずっと昔の流行品で、私もたくさん持っているが、今では古く、時

代遅れで役に立たん。娘に化けて、しっぽが出るのは当然だ。」

と冷やかしながら、なおも続けて言いました。

「立派に化けるには、やはりこのしゃもじにかぎるよ。」

と言って、自分が手にしているしゃもじを振りかざして自慢しました。

娘は、さも恥ずかしそうに、目には涙さえ浮かべながら、うなだれてしまいました。

助太郎は、そんな娘の様子を見て言いました。

「何もがっかりすることはない。私は、こんなしゃもじは、ほかにもいくつか持っているから、あんたの玉と取り替えてやってもいいぞ。」

と言って、娘が手にしていた光り輝く黄金の玉と交換してやりました。

娘はとても喜んで、何べんも何べんも、助太郎にお礼を言って、胡麻山の方へ去って行きました。

助太郎は、狐と同じように何にでも化けられる黄金の玉を手に入れたので、有頂天になり、自分の鋭い知恵に関心しながら、黄金の玉を得意げに懐にしまい、意気揚々とわが家に帰ってきました。

その日の晩は、親せきや友達など大勢の人を呼んで、黄金の玉を手に入れたお祝いの酒盛りを開きました。

みんなが集まると、今日の出来事を得意気に話しました。

そして、黄金の玉を大事そうに懐から取り出しました。ところが、さあ大変、今まで光り輝いていた黄金の玉は、みるみるうちに光が消えてしまい、ただの石ころに変わってしまったのです。

これに驚いた助太郎は、もしや、と思い、日置で仕入れてきた魚かごのふたをとってみると、たくさんあった魚は1匹残らずなくなっていました。

助太郎は、ぽかーんと開いた口がふさがりませんでした。

コーン。コーン。

(採話…小丸 山名勝重筆録より)  
昭和61月3月たかなべむかしばなし第一集



『たかなべ伝・伝リターナズ』では、当時、高鍋町の高齢者ボランティアグループ「ふるさとを伝える会」のみなさんが、高鍋町内の故老をたずね歩き、記録・作成した物語を紹介しています。

